
空、晴れあがった

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空、晴れあがった

【コード】

N5839F

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

中学二年生の恵理は、片思いに悩む普通の女の子。六月の雨振る日曜日に思っていることとは…。

第一章 雨降りの日曜日（前書き）

この物語は連載とします。週に一回づつ書いていければな、と思っています。

第一章 雨降りの日曜日

二階の私の部屋の窓の外から、一定のリズムで雨音が屋根から落ちてくる音が聞こえる。その音がまるで私の心の一部分に溜まっていくみたいでなんとなく憂鬱な感じがする。私は、開いていた英語の教科書とノートを閉じて、i pod をかけた。お気に入りの青山ルテーマの唄を聴きながら口ずさむ。この前、お母さんに夕ご飯の時に余り大きな声で歌うと近所迷惑よ、なんて言われたので小声で歌う。ワタシはあなたのそばにいるよ、とか今まで生きてきて一回も言った事ない。でも、気持ちはよくわかる、わかりすぎるんだなあ、と私は思った。目を閉じて、真治君のことを思い浮かべる。昨日、とてもかっこよかった。昨日の体育の授業は男女の位置が近かった。サッカー部の真治君と来たら、足は速いし、昨日のバスケットボールでも大活躍してた。ポーツとなって見てたら、横に座ってた親友の明日香が幸せそうだね、とか言ってきた。うるさい、と言いつつ真治君から目は離さなかった。気づけばルテーマの曲が終わってる。繰り返し聞く事にして、窓の外を見た。雨は窓ガラスを濡らし、水滴が弾けるのが見える。学校の無い日が楽しくない、と思いはじめたのはいつからだろう。それまでは、決して学校なんか好きじゃなかったのに。理由もわかってる。真治君に会えないからだ。二年六組のクラスメイトだから、学校がある限り毎日会える。日曜日は会えない。つまらないの、と私、西野恵理は勉強机を離れ、ベッドに横になる。早く明日になあれ。私は、何の気なしにテレビをつけた。昼ドラと言うものが放送されている。私はたいしてテレビ好きではないが、たまたま今つけた連続ドラマらしきものに心惹かれた。主人公は私と同じ中学生らしい。二人で仲良く放課後家に帰っているシーンだ。いいなあ、私も真治君と一緒に帰りたい。でも家の方向は真逆だから無理だな……。なんて思っていると、二人が

険悪になりだした。

「どうしてユウジ君はノゾミちゃんとあんなに仲がいいの？」

「別に、友達同士話してるだけじゃん。」

ユウジ君とやらもムキになっている。密かな浮気心でも持つてるんじゃないの？と、私は内心思った。

「でも、メールもやり取りしてるし、一緒にプリクラも撮ってるんですよ。」

「それはバレーボール部のマネージャーだからじゃん。アミは考えすぎだつて。」

アミちゃん、納得がいかないらしく、下を向いてふくれている。ユウジ君もむすつとしていいる。そのまま、じゃあね、とだけ言って別れる二人。あーあー、好き同士なのだろうけどこれじゃあ駄目だな、と私は偉そうに思った。そこでドラマは一旦終わり、次回予告になった。タイトルは「三月の雪空」だった。今六月なんだけどな、と一瞬思ったが、来年三月ぐらいまで物語が進むのかな、と思い、次回もチェックする事にした。万が一見れないならお父さんに言っでDVDに録画してもらおう、と思った。ふと、お父さんに昔に勧めてもらった小説の名前を思い出した。確か、「世界の中心の愛を呼ぶ」だった。お父さんの寝室で書斎に行けばあるはず。私は一階に降りた。お父さんは居間でテレビを見ていた。

「お父さん、本を貸して欲しいんだけど。」

「おう、恵理。何を貸して欲しいんだ。」

と、お父さんはタバコをくゆらせながら言う。あー、臭い。どうして大人はお父さんに限らずあんな息苦しい煙たいものをわざわざ吸うんだろう？と思いつつ、「世界の中心の愛を呼ぶ」を貸して欲しいの、と言うと、お父さんは含み笑いをし、

「そうか、ああ言うのが読みたくなる年頃か。はは。書斎にあるから探して持って行きなさい。」

と言う。何か私の心の奥を読まれたようで恥ずかしい気がした。

さっさと書斎へ行き、目的の本を探す。あったあった。予想より分

厚いな。何枚かページを捲ると、文章は簡単だ。これなら私にも読めるだろう。自分の部屋に取って返し、ページを開いていく。息もつかず読み進め、晩御飯の時間までにあっという間に読み終えた。私は頬に涙を流していた。好きな人を失う事ほど、この世に辛い事は無い。帯に書いてある言葉を何度もかみ締めては、また泣いた。お母さんが、ご飯よ、と読んでるけど、こんな兎の目じゃ降りていけない。しばらく、放心状態で時間を過ごした。勝手に心の中であの人が死んだらと仮定して、また泣いた。私は、これが恋愛感情なのかな、と思った。窓の外には夕闇が訪れた。でも、また明日明るくなれば、真治君に会える。だって、死んでないもん。私はなんだから我ながらおかしくなって、ティッシュで涙を拭いて、晩御飯を食べに行つた。

第二章 図書館で

梅雨は明け、もうすぐ夏休みだ、と言うのをひしひしと予感させるような暑い日々が始まった。私は肌が白い。お父さんとお母さんも白いので、間違いなく私は二人の子供なのだろう。そして、日焼けが大嫌いなのに、なぜか人一倍陽に焼けやすい。すぐに肌が赤くなっちゃうのがすごくイヤなので、日焼け止めクリームを顔と腕に塗り塗りして学校に向かう。でも、二日に一回は体育で水泳の時間があるから、そのたんびに塗りなおさなきゃいけない。これを怠ると、特に顔が常に照れている人のようにになってしまう。親友の明日香いわくはリンゴ病に見えるらしい。明日香とは小学校以来の親友で、住んでいる家も近所だし、何度も同じクラスになっているので気心は知れている。と言うか、分かりすぎて何も説明しなくてもいいぐらいで、無言で目が合うと自動販売機でジュースを買っている、みたいな感じ。夏休み前に中間テストがあるので、真面目にテスト勉強をする日々が続く。

テスト一週間前に迫った日曜日に、私と明日香は町内の大きな図書館に勉強に行く事にした。今日もピーカン、と呼んでいいほどの暑さだ。朝の10時ごろ、明日香が迎えに来て、二人でのるのろと市立図書館へ歩く。三つ隣の家に飼われているシベリアンハスキーのトムがべったり舌を出して玄関の庇の日陰でのびているのが可笑しい。

「昨日のツカーンの出たMアフェアー見た？」

「見たよ、ソノグチ君って歌上手だよねえ」

「髪型が変わってたよね。短く刈ってたねー似合ってたわ。」

明日香はいわゆるジャニオタと呼んで差し支えない。部屋にはポスターを貼り、財布には何枚もプロマイドが入っているし、携帯の

待ち受けは確かタキサワ君だったはずだが、コロコロ変えるので今はまた違う誰かかもしれない。そうして歩いていくと、やがてJRの駅前に到着する。大きなバス停があつて、そのロータリーの横に待ち合わせの広場みたいなものがあり、噴水や彫刻の像みたいなものがある。辺りにはミスドとかコンビニとか大きなショッピングモールがあつて、その横の大きなビルが図書館だ。私の知る限りで一番大きく、ビデオの視聴や自習室や色々揃つていて、今日はその自習室を利用するつもりだ。建物の中に入るとエアコンが効いていて二人ともほつとした。そして、二階へ上がると、日曜日だから高校生や、私服の大学生っぽい人も含めて、既に席は結構埋まつている。「すごい人よ」

「あの奥が二人分開いてるよ」

明日香が見つけた席へ行くと、見慣れた顔がいた。

「よつ、倉沢。西野もいるじゃん」

と声をかけていきしたのはクラスメートの邦夫だ。塩崎邦夫。屈託ないキャラで面白いけれど、少々おつちよこちよいでもある。そして、その横にはなんと真治君がいた。狩野真治が本名だけど、私のテンションは一気に上がった。心臓の鼓動が早くなつたのがわかつた。

「偶然だな。お互い真面目だよなあ」

と真治君が言つてニコツと笑つた。明日香が本当にねー、テスト前だもんね、とか言いながらこつちを見てくる。あんたも何か言いなさいよ、という視線なのだが、私は何も言えなかつた。心の準備なさすぎ!と思つていた。下を向いて椅子に座り込む。図書館では基本的に誰も何も話さない。しーんとしているのが暗黙の了解なのだ。机は一つの方角に向けて並べられているので、私は邦夫と真治君に背中を見られている、と言つ体勢である。ほんの3メートルの範囲にあの人がいる。それを考えただけで全然全くこれっぽっちも勉強に身が入らない。でも、私はなんとなく幸せだった。こんな偶然もあるんだ、とちよつと嬉しくなつたりもした。その表情を、明

日香は見てたらしい。明日香もくすつと笑っていた。私が勉強している振りをしてるうちに、人が席を立ち始めた。どうもお昼の時間らしい。私と明日香は、お昼はミスドに行く事に決めていた。すると、邦夫が声をかけてきた。

「なあ、せつかく会ったんだし一緒に昼ごはん食べないか？それとももう帰るのか？」

いくいくもちろん行きます、まだまだ帰りません、と私は心の中で返事をしたが、言う勇気が出ない。が、明日香はさすがわかつていて、

「お昼からもまだがんばるよ、一緒にお昼ごはん行こう、ね？恵理もいいでしょ？」

「う、うん、いいよ」

私も腹から声を出す感じで言った。少々挙動不審な人の悪寒。

「コンビニでお弁当買おうかな、と思つてただけど、食べる場所がないよな。どうする？」

と、真治君が言う。邦夫もそうだなー、図書館って飲食禁止だよな、どうしよ、などと言っている。明日香は約束を覚えているので、ミスドに行こうよ、ドーナツ食べたいのよ、と勇敢にも誘っている。私には到底真似できない。すると、二人ともそれはいいな、よし、決まりなんて言っている。真治君と一緒にお昼ごはん！私が内心喜んでいると、明日香はウインクしてきた。明日香の分をおこつてあげてもいいぐらいだわ、と私は思った。そして、四人は駅のほうに戻り、ミスドへ行ってめいめい好きなドーナツを食べた。私は殆どしゃべらず、三人がテスト範囲について、広すぎるとか、三日目の組み合わせがひどいとか色々と言っていた。私は聞いているだけで幸せだった。たまに明日香が振ってきて、うん、そうかなとかしか答えなかったけど、真治君も私に相槌を打ってくれたりした。そして、また午後からは図書館に戻った。今度は、結構まだ席が開いていたので横に四人並んだ。明日香が気を利かせたので、なんと私は真治君の横になった。案の定、午後からもまるで勉強はは

かどらなかつた。そして、帰り道、四人は別々の道に別れて、明日香と二人で歩くようになった時、私は明日香に抱きついて感謝した。明日香は喉が渴いたなあとか言うのでアクエリアスをおごつてあげた。陽はいまだしぶとく地平線の際に残っているけれど、吹いてくる風は汗をかいた肌に心地よい。私は、今日の事は日記に書いて残しておこうつと、と思った。

第三章 放課後

やっと中間テストが終わった。私の成績はまずまずで、少なくともお母さんに睨まれるような点の教科は一つもなかった。一安心、というところだ。新学期のテストでは社会の勉強をさぼったらきめん点数が下がって、なんと四十点台だったから、お母さんの大目玉を食らって、中学生になってから部屋に置いてくれたテレビを取り上げるとかヒステリーを起こされて大変だったんだから。全ての答案用紙を返してもらって、安堵した私は、明日香と語りながら放課後の音楽室に向かった。私は合唱部に所属している。声はお世辞にも太くないけど、声域は高いからソプラノをやっている。明日香は若干低いのでアルトだ。今取り組んでいるのは、「河口」と言う合唱曲で、歌っていて気持ちいい。恥ずかしがりなくせに、歌うのは別らしく、私はいつも怖気ずに歌っている。もっと小さい頃はピアノを習っていたし、発表会などでいわゆる舞台に出る事も多かったからだろうか。一人っ子の私は他にも新体操も習わせてもらったけど、つま先が痛いから小学校に上がったぐらいで辞めちゃった。ピアノも中学生になった時点で辞めて、喉で音を鳴らすほうを目指して、合唱部に入った。おかげで、家でも歌うから、ご近所さんに文句言われてるんだけども。

部活も終わり、明日香に帰ろう、と言うと、いけない、と言う。どうしたの？と聞くと、担任のゴリアテに出すノートがあるんだ、職員室に付き合ってくれる？と言うので、ついて行った。私たち、二年六組の担任は熊川吾郎と言う。四十台の、少々頭髪が薄くなってきたオジサンだが、体がとても大きく、ついでに鼻の穴もかいので、あだ名はゴリアテになっている。意味は巨人兵士らしいけど、雰囲気をよく現していると思う。怒ったら怖くて、男子なんか

はよく頭を拳骨でガツンとやられている。一回真治君も昼休み帰ってくるのが遅いと言う事で小突かれていた。けれども、普段は鷹揚として優しい。そのゴリアテは、職員室で何か調べ物をしていた。

「先生、これ、出すの忘れてました、すみません」

「お、倉沢か。まだ出してなかったか」

と言いながら、ゴリアテはノートを受け取ると、私たちに机の上にあつたどら焼きをくれた。みんなには内緒だぞ、と言うとまた調べ物に戻った。私たちはお礼を行って職員室を出た。

「嬉しいけどこれ食べたら喉かわくね」

「浄水機の水飲んでから帰ろうよ」

と言う事で、運動場のほうに置いてある浄水機のほうへ向かった。グラウンドでは、夕方の熱気の中、野球部とサッカー部とハンドボール部が走り回っている。私は思わずサッカー部の真治君を探した。すると、物凄く近い場所でドリブルをしていた。わあーっ、と思つていると、向かいの選手を抜き切れず、ボールが足に当たつて、私のほうに転がってきた。明日香は後ろで水を飲んでいる。わ、わ、どうしよう、と思つて、ともかく手でサッカーボールを受け止めた。真治君が息せき切つてこっちへボールを取りに来た。

「西野！パス！」

と言われ、私は慌ててボールを両手で放り投げた。真治君はそれを受け取り、汗を腕でぬぐつた後、

「サンキュ」

と言つて、また走つてコートの方へ戻つて、両手でボールを高々と上げてスローインし、中へ駆け込んでいった。それを夢見心地で見ている私に、明日香が、

「いいタイミングだったね。お礼言われたじゃん。」

と言つてニヤニヤとしている。誰かに見られたら勘ぐられるじゃないの、と思つた私は、すぐに明日香の腕を引っ張つて運動場を去つた。

「もう。変な顔しないでよね」

と私が注意すると、

「大丈夫よ、それぐらい」 あんた神経質よ」

と、ゴリアテにもらったどら焼きをぱくつきながら言う。私もお腹がすいたので、カバンからどら焼きを出して、ビニールを開きながら、

「人事じんじだと思って・明日香には好きな人がいないからわからないのよ」

と、私はぷーっと頬をふくらませた。明日香はジャーニーズにしか現在興味がない。

「わかった、わかった、今後は気をつけるから。ね、夏休みになったらユッコらみんなプールに行こうね」

上手く話題を逸らされたな、と思いつつ、私もプールには行きたいので、その話に相槌を打ちながら、真夏の夕暮れを家路についた。

第四章 私の顔

いよいよ太陽が猛威を振るう真夏がやってきた。夏休みに入つたので、ぐうたらと9時ごろに起き出す。お母さんも特には何も言わない。クーラーを付けているにも関わらず、寝汗のようなものをかいているので、私は顔だけでも洗うことにした。きちんと泡立ててよく肌をマッサージするように洗うと、毛穴が開いていいらしい。何度も水ですすぎ、ふと、自分の顔をまじまじと見つめる。瞳は綺麗な二重だ。これはお母さん譲りなのだろう。鼻は余り高くない。お父さんがヘチャムクレ顔のせいに違いない。口元は端がちよつと上がっている。アヒル口と言われる事がある。でも、私はなんとなく暗い顔をしている、と思う。元気がないというか、小学校の時も通知簿に物静かだのなんだのと書かれていたし、自分でもそう思う。およそ社交的、と言うところから遠いところにいる。鏡に向かって無理に笑ってみた。我ながら結構可愛い、と自画自賛した後、ため息をついて部屋に戻った。カーテンの向こうの世界は揺らめいて見える気がする。僅かに移った私自身の細い体がそのまま溶けて消えそうな気がした。私は慌ててその場を離れ、溜め込んでいる録画したDVDを見ることにした。「三月の雪空」が相当分溜まっている。台所からクツキーとアイステイヤーを持ってきて、見入る事にする。残念ながら途中でから見始めたので、最初の数回の内容がわからなかった。なので、インターネットのHPで確認したところ、主人公のアミちゃんとユウジくんは家が近所の幼なじみらしい。二人とも同じ中学に通い、仲良しなのだが、付き合ってはおらず、物語はこの二人の揺れる思いが中心に描かれている。他にも、ユウジくんに想いを寄せるノゾミちゃんや、二人を見守る理解ある草野先生などが物語を彩っているみたい。私にはとても親近感の持てるドラマだ。その草野先生はアミちゃんの担任らしい。放課後の廊下でアミちゃんに

草野先生が話しかける。

「花園、最近元気ないぞ。仲良くしてくれないのか」

「はい……ほとんど無視されてるような」

「ケンカをしたらしばらくは距離をとるのも必要なんだよ。でもやがて戻るから心配しなくていい」

「そうですか。じゃあしばらく我慢します。でも、辛いよ」

草野先生、微笑んでアミちゃんの肩に手を添える。アミちゃん、うつむいたまま。どうでもいいけど私の担任のゴリアテは絶対こんな事言ってくれないに違いない。アミちゃん、トボトボと夕暮れの街を歩いていく。私も同じように肩を落として帰る時があるなあ、とクツキーをほおびりながら思った。四つ角に差し掛かると、すごいスピードで単車が飛び出してきて、びっくりするアミちゃん。

「ボーっと歩いてんじゃねーぞガキイ！」

単車の運転手に怒鳴られて、すくんでしまう。何この人、何様なわけ？私はイライラした。思わず涙ぐむアミちゃん。真つ直ぐ家には向かわず、日の陰る神社の境内に行き、携帯を覗き込む。朝にユウジくんにメールを打ったのに、まだ返事が来ないようだ。ため息を吐いた後、お賽銭を投げて、社にお願い事をして帰っていく。何をかは説明も要らないな、と私は思った。その後、二人は仲直りをするのだが、どうやらユウジくんのお父さんに転勤の話が持ち上がったってきたらしい。転校したら、もう会えないじゃん、と私が思ったところで録画は全部終わった。もうしばらくは物語は続きそうだけど、最後は離れ離れで終わっちゃうのかな、だとしたら、悲しいな、と思う。うちのお父さんはどうなんだろうか。貿易関係の商社らしいけども、ひよっとして海外勤務なんて事もあるのかな。一回聞いてみよう、と思った。

夜になって、明日香とプールへ行く日を相談した。その前に、水着を買いに行きたい、との事なのでついて行くことにした。私は緑と黄色のワンピース型を持っていて、これは小6の時に買って

らったんだけど、幸か不幸か一向に体型に変化がないので買い換え
る必要がない。明日の部活の帰りに行く事になった。約束を終え、
少し机に向かって夏休みの宿題をした。

合唱部で、エアコンもろくに効かない中で、ヘトヘトになりなが
ら練習を終え、そのまま歩いてシヨツピングモールへ向かった。こ
こにはブランドの店舗も多数入っていて、お洒落な服屋さんが多い。
前に来た時に値札を見て仰天した記憶がある。以降、基本的に来る
には早い場所、と認識していたけど、明日香は今日も多くお金を貰
った、と言つてここへ来た。そして、ピンク基調の可愛らしい水着
を買った。ちよつと派手じゃない？と私は言ったが、地味なスクー
ル水着みたいなの買うんだったら学校のを着ていくわよ、などと言
つて聞かなかつた。そして、なぜか終始異常にご機嫌なのであつた。
そんなにもプールが楽しみなのかしら、と思ひながら私は家路につ
いたのだつた。

第五章 プール

八月に入ってすぐの日曜日、私は明日香と、ユツコらクラスメイト四人との合計六人で、市内のレジヤールランド内にある巨大アミューズメントプールへ行くことになった。そこは、テレビでCMが放映されるほどで、一度行ってみたい、とみんなが話題にしていたもの。電車で数駅で、ちよつと遠いのだけれども、大規模な滑り台や、流れるプールなど、楽しそうなアトラクションがあるのが魅力。少し遠い事を考慮に入れて、朝の9時に地元の駅に全員で集合する約束にしていた。幸いと言うか、朝も七時頃から焼け付くように太陽は燃えていて、絶好の水泳日和に違いない。私もワクワクしながら、まず明日香の家によって、そして駅に向かう事にした。明日香が柄のプリントTシャツに水色の短パンで出てきた。

「派手な格好だねえ」

私は、白の半そでのカッターシャツの下に、ピンクのTシャツで、下はチノパンと言った格好で、明日香に、あんたが地味なのよ、と言り返されてしまった。そんなことないよーと言いながらも、もう少し大胆な格好にしたらよかったかな、なんて思ったりした。明日香は今日もご機嫌と言うか、人の顔を見てニヤニヤ笑っている。何かとても楽しい事がもうすぐ起こるから、それを我慢できない、と言った表情だ。私にはそれがなんだか見当もつかないし、聞いても答えずに、さ、もうすぐ駅だね、ユツコらもう来てるかな、なんてしらを切る。そして、駅に着いた途端、明日香の含み笑いの意味を私は理解した。と言うか、最初は意味が分からなかった。真治君や邦夫やその他同じクラスの男の子が数人集まっている。手に手にカバンを持って、サンダル履きの風貌は、私たちと同じくプールか何かに行く様子だ。

「おはよう。みんな集まるの早いんだね」

と明日香が当たり前のように声をかける。

「いよつ。俺ら、朝から集まってさっきまで大学のグラウンドでサッカーやってたのさ」

と、邦夫が気さくに応じる。向こうからユツコらも集まってくる。「新横浜波間スカイウォーカープールはすごい人多いらしいぞ、お互い見失うかも知れないぜ？」

真治君がこんな事を言つてユツコらを脅かしている。と言う事は、あれ？みんなで行くの？私はいきなり真治君に会っただけで思考停止気味ななかで必死に考えた。明日香を見ると、ウインクなんかしてくる。知らなかったのは私だけってことらしい。みんなで早速快速電車に乗り込む。ちよつとした遠足みたいだけど、心の準備の出来ていなかった私だけ浮いている感じ。明日香を引っ張って事情を聞く。

「なんで私にだけ教えてくれなかったの！」

「だって、言ったら私行かないとか言い出しそうだったしさ。それと、驚かそうと思って」

確かに大いに驚いた。まだ私は何か言おうと思つてたら、後ろから邦夫が

「おい、これ食べるよ。おいしいぞ」

と言つて、イチゴチョコみたいなのをくれた。それで、私は、これ以上怒るのを止めて、貰ったチョコを食べる事にした。明日香は得意そうだった。

電車はすぐに目的地に到達し、そこから少し歩くともう新横浜波間スカイウォーカープールが見えた。もう、駅からすごい人の量で、案の定みんな同じ目的地に向かっているのだった。私たちは押し合ひへし合ひ歩いた。前に行く真治君たちを見失わないようにするのに必死だった。入場ゲートをくぐつて、とりあえず着替えて、お互いが合流するのも大変だった。

「ありえない人ばかりね。泳ぐんじゃなくて浸かる、になりそうね」

と、明日香がボソツと言った。私は既に軽い眩暈を感じていたりした。せつかくプールに来て日射病とかになつて倒れたらみんなに迷惑だ。ところが、男の子たちは元気そのもので、めいめい荷物を置くとプールに走って行く。真治君も張り切つて去つていった。私たちはともかく、ゴザを引いたり、パラソルを立てたりして居場所を確保し、三人ほどが男子の後を追つた。私と明日香と、もう一人のユキはともかく状況を見守る事にした。

「温泉つてこんな感じだよな」

「私、浮き輪膨らませる・・・」

私は持つてきた浮き輪をふうふう言つて膨らませた。浮き輪装備で行けばスペースを確保できそう、と思つたからだ。明日香もユキもそれに習うように浮き輪の準備に勤しむ。

「でも、誰かが荷物見といたほうがいいよね」

「誰かが帰つてきたら交代で泳ぎに行こう」

そう言っていると、一人の男子が腹減つたから何か買つてくる、と言つて帰つてきた。気が利くらしく、焼きそばをほおばりながら俺がここで荷物見てるからお前ら泳いできなよ、と言つてくれた。そこで三人もおおずとプールへ入る。入つたのはどうやら波が起るという仕掛けがあるらしく、ただ浮いてるだけで楽しい。そこへ、邦夫ともう一人の男子がやってきて、わざと浮き輪を揺らしたりする。

「もう！あっち行つてよ」

と明日香が怒ると、ごめんよ〜とか言つて去つていく。真治君の姿はない。どこにいるのかしら？と思つても、人が余りにも多すぎて発見できない。横でお父さんが子供を持ち上げてはわざと落としている。どこまでも空は青く澄み、太陽が眩しく私たちを照らしている。水の匂いが辺りを埋め尽くし、それもまた心地よく、私は、随分ゆつたりとした気分になつて、うつとりと波に揺られていた。ふと気がつくと、明日香もユキもいない。あれっと思つて、プールから上がった。荷物の場所に帰ると、男子が三人、真治君も含め、

財布を手買い物に行くところだった。

「おい西野、何か買に行こうぜ」

真治君がその声をかけてきた。一瞬硬直したが、断る理由もない。「う、うん、ちょっと待ってね」

慌ててカバンから財布を出して、おずおずと三人の後をつける。

浮き輪を外して来ればよかった、と後悔した。

「この浮き輪可愛いよな、これ恐竜なのかな」

真治君が屈託なく私の浮き輪を軽く叩いてくる。私は、こんな子供じみた浮き輪を持ってきた事が恥ずかしくなってしまった。男子もいると知ってれば持つてこなかったのに・・・などと考えて返事をしそこねたので、真治君は黙ってしまった。最悪だ。せつかく話しかけてくれたのに！

真治君はそれとは無関係に、ずっと私の浮き輪の端を持っている。物凄い人だから、はぐれないように気を使ってくれているに違いない。それは、帰りしな、荷物のところまで続いた。私はとても嬉しかった。それに、近くで見ると真治君は筋肉質で引き締まっていたとしても男らしかった。この後、一旦全員集まるまで待つて、午後は交代で荷物番を決めて、巨大滑り台などアトラクションで遊ぶ事にした。男女三人づつ、二組に別れた。適当にあみだくじで決めたのに、運命の神様は大層私に親切らしく、私は真治君と同じ組になった。その時も顔が火照っただろうけど、日差しのせいだと思ってくれたと信じた。まず、私たちの組が動き回る事になって、私はひたすら真治君の近くにいた。図々しいと我ながら思ったが、なにしろ満員電車並みの人だから、不自然さは一切ない。何度も近くで目が合ったし、一回こけそうになった私の手も握ってくれた。もうこれで帰ってもいい、と私は思った。人気アトラクションは並んだりして時間がかかったし、交代で待つている間も時間はうんとあったので、私は真治君と初めて親しく話す機会を得た。今日の約束を取り付けたのはおそらく明日香だろうけど、死ぬほど感謝せねばならない。

「西野は合唱部なんだろ。歌はうまいの？」

「わからないけど、歌うのは好き」

「何か今歌ってよ」

「え、恥ずかしいから・・・今は・・・」

「今度はみんなでカラオケBoxに行こうぜ。その時ならいい？」

「あ、うん、カラオケなら・・・」

カラオケBoxなら合唱部のみんなで何度か行った事はあるけど、男の子と行ったことはない。きちんと歌えるかな・・・？なんて不安を感じていながらも、じゃ、約束な、なんて言われたので、本当に行く事になるかもしれない。その他にも、学校の話とか、ゴリアテの話とか色々話した。明日香は横で、チャチャを入れるでもなくニコニコしてる。本当にこんな事になるとは全く思っていなかった。お昼を過ぎても、人は全く減らないので、さすがにみんなも疲れたので帰ることになった。地元の駅で別れる時、気のせいかもしれないが、真治君がこっちを見つめている気がした。明日香と二人で並んで帰る。

「ふふふ、少しだけお近づきになれたみたいね」

「最初は何で教えてくれないのって思ってたけどね」

「終わりよければ全てよし、でしょ」

「今度みんなでカラオケに行こうって真治君に言われたよ」

「じゃあ早速企画しないとね」

「明日香ってどうしてそんなにいい人なの？」

「私はナイチンゲールの生まれ変わりなのよ？」

「そう言えば明日香は将来看護師になるのが夢だったっけ。」

「私、このお礼は必ずするからね」

「じゃあツカーンのコンサのチケット取るときは一緒に電話してね」

「うん、いっぱい電話かけるよ！」

若干空には雲が集まってきた。抜けるような青が目染みる。私は、今日と言う日を神様に感謝しようと思った。

第六章 秋の足音

夏休みが終わって、また学校が始まった。担任のゴリアテが真っ黒になつてた。サーフィンが趣味らしく、今年の夏は殆どを海で過ごしたらしい。明日香が、ますますゴリラっぽくなったとかクスクス笑っていた。そう言えば、真治君もそれなりに日焼けしている。運動好きそうだからなあ、と思つた。私はと言えばあのプールの日以外で直射日光を長時間浴びていないし、日焼け止めを塗りまくつて外に出たので相変わらず真っ白。ふと、授業中に、真治君はこんな真っ白い女の子なんか好きじゃないかも、と空想したりしてたらいきなり先生に当てられて答えられなかつたりした。

ある休み時間、トイレに行こうとしたら、真治君とすれ違う場面に出くわした。そつと避けてくれた時、何も話してはくれないけれど、あのプールでびったりそばにいた時のことを思い出して、胸の鼓動がほのかに高鳴つた。そう言えば、あれ以降特別な話はないけれど、カラオケに行く、と言う話はどうなってるんだろうか。放課後の合唱部で、明日香に聞いてみることにした。

「明日香、あのね、聞きたいことがあるんだけども」

「どうしたのあらたまつて」

「あのね、その、夏休みにみんなでスカイウォーカープール行つたでしょ？」

「うんうん」

「そのときにね、また今度みんなでカラオケに行こうって言つてた話、どうなつたの？」

「ああ、それね、具体的にはいつかが決まっていんだよね。いつがいいのかな」

なるほど、タイミングの問題なのか。何かイベントがないと声か

けにくいのはわかる気がする。と言うか私だけだと、イベントがあったとしても男子に声なんてかけられるわけもないけど。

「誰かの誕生日とかがあったらいいんだけどね。ユツコとかいつが誕生日かしら」

明日香が大きな目をクリクリさせながら考えている。明日香は、黒髪を肩ぐらいで揃えて、流れを付けて後ろにそよがせているような、見るからに涼しげな雰囲気を持っている。それでいて面倒見のいい子だから、本当に一番大事な友達だ。ジャーニーズ狂なのだけはなんとも言えないけど。

「ところでえ」

と、部活が終わって二人の帰り道で、改まって明日香がじっと目を覗きこんで言う。

「恵理は結局真治君とどうなりたいわけ？」

と、微笑みながら言うてくる。問われて、私はハツとした。そう言えば、どうなりたいのかしら。付き合いたい？でも、付き合うつて、どういうことかしら。空想だけは一人前だけど、現実には無力な私は、具体的にどうしたいとかは考えた事もなかった。

「そう言えば、考えた事もなかった。でも、例えば、メールをやり取りとか、一緒に家に帰るとか・・・」

「あははーっ、やっぱりそうよね、私も赤西クンと手をつないで歩きたいと思うもんねえ」

明日香はそう言うのと、腕組をしてしかめっ面をして、メアドくらゐなら・・・家の方向が・・・なんてつぶやき始めた。なんか、任せてたら明日には真治君のメルアドが手に入りそうな勢いだ。でも、そこで初めて、私の中に違和感を感じた。何でもかんでもこの頼もしい友人にやってもらっていいのだろうか？それで真治君と仲良くなつたとして、それで万々歳でいいのかな？私は私でむっつりと黙り込んで考え込んでしまった。明日香はその様子を、どう解釈したのかわからないけれども、ま、焦らずいこうね、などと言って手を振って去っていった。

夜はだいぶ涼しくなってきた。窓を開け放して、二階から星が瞬いている夜空を見上げた。今日見ている星は、遙か彼方の、しかも数百万年前の輝きだ、と理科の時間に習った。私はまだ十四年しか生きていない。途方もない年月で、想像もつかないけれども、今私が見ている星はもう燃え尽きてなくなっているのかな。あんなに美しいのに、何か不憫な感じがした。何か、しなきゃ、と思う。何故そんな決意をしたのかよくわからないけれど、何かしよう。お母さんは口癖のように、行動して後悔するほうが、しなくて後悔するよりいいのよ、と言う。この前も食卓でそんなこと言って、その後にお父さんと結婚したのがお母さんの後悔なのよ、と言ってお父さんをへこませて笑っていたっけ。よし、何かをしよう。私は燃えてきた。携帯を取り出し、メールアドレス 交換で検索を開始した。夢中でサイトを覗いていると、ふと寒さを感じて窓を閉めた。吹き行く風は、木の葉を巻いて町を通り過ぎていった。

第七章 席替え

ある秋の朝、朝練の後の眠い目をこすって、ホームルームの時間を過ごしていたら、担任のゴリアテが席替えをしよう、と言い出した。そう言えば定期的に席替えと言う物があったっけ、と言う事を思い出した。と、同時に、前回の席替えの時に、真治君の隣になれたらいいな、とこっそり念じていた事も思い出した。今は斜め遙か前のほうに真治君はいる。近くになれたら・・・と思うと胸が高鳴ってきた。どうやらまたくじ引きらしく、ゴリアテが黒板に机の場所と番号を書いている。教壇の机には町内の商店街のくじ引きで使っているような上に穴の開いた箱が置いてある。マジックか何かで無粋に「席替え用くじ引き箱」と書いてあるのがゴリアテらしい。何事もシンプルな人だ。

「よし、そっちの列の奴から順番に引いていけ。引いたら一旦は席に待機な」

私の引く番は結構後のほうだ。一人ずつ何事かおしゃべりしながら引いていく。真治君が引いた。何番を引いたんだろう。列に並んで、私も箱に手を入れて紙を取る。三十二番と書いてある。真ん中後列のほうだ。席に戻り、まんじりともせず終わるのを待った。一番最後の子が引いた時点で、ゴリアテが

「よっし。じゃあ、荷物をまとめて移動な。ぶつかったりするなよ。教科書やら何やらを一旦カバンに入れて、三十二番の席に向かう。あつ、真治君がこっちのほうにやってくる！まさか・・・本当に！？なんと真治君は二十四番、私の隣の席だ。心臓の動きが明らかに激しくなった。顔がなんとなく熱くなる。幸運がやってきた！今日の占いの恋愛運は100点だったに違いない。

「よし、じゃあ次は文化祭の出し物の相談をするぞ」

ホームルームは違う課題の話になった。上の空の私。ふと、目線

を感じたので横を振り向くと、真治君がにこやかにこちらを見ている。

「よろしくな」

と、一言だけだったけど、私は死ぬほど嬉しかった。嬉しすぎてまた返事をし損ねた。三秒ほど間が開いて、ようやく私も

「う、うん」

とだけ言った。言った後は何も考えられず無我の境地に突入した。無駄に筆箱からシャーペンを出したり入れたりノートに落書きをしたりした。休み時間になったら、明日香がすごい勢いで私の机のところをやってきた。当然例の顔をしているので、すぐに廊下に連れ出した。

「超いい展開じゃん。せつせと話しかけて仲良くなるのよ？」

と、明日香は無理な事を言う。何を話しかければいいの？と私は聞いた。

「朝のあいさつから始まりー、部活の話とかー、テスト範囲がどうとかー、いくらでもあるでしょ」

どれも出来そうもないのだが、出来ないと言うと怒られそうなので、何とかがんばる、とだけ言っておいた。

休み時間が終わり、次の授業が始まった。横目でチラチラと真治君を盗み見る。何かいけないことをしているような、それでいて満足感があるという気持ちだ。これから毎日こうなんだ、と思うと嬉しくなった。真治君は快活なので、授業中も結構おしゃべりするようだ。

「だから、今年の優勝はマリノスだって。井原最高だよ」

「だろうな。バンバンゴール決めてるもんな。でも、サンフィレッツチエも強いぜ」

どうやらサッカーの話をしているらしい。私は観たことがない。今度、見てみようかな、と思った。

「おおっと」

横を見ると、真治君が床に消しゴムを落としたりしい。私の机のほうに転がってきたので、慌てて拾ってあげようと椅子を引いて、拾おうと手を伸ばしたら、真治君の手と手が触れた。消しゴムは結局真治君が拾った。

「わりい、ありがとうな」

と真治君がお礼を言ってくれた。私は頷いただけで、顔が火照ったのがわかった。これはいけない、間違いなく顔が真っ赤モードだろう。授業が終わった後、窓のほうへ言って風を受ける事にした。どうしよう。顔見られたかな。見られていませんように。涼しい風が吹いてきた。大空に入道雲が浮かんでいる。それを背景に、ツバメのような鳥が緩やかに飛んでいる。私は、なんとなく歌いだしたような気持ちになった。今日の部活は張り切っていこう。明日香に、さっきの出来事をこっそり報告するために、私はくると窓のそばを離れた。

第八章 三月の雪空

真治君と隣の席になってから一ヶ月ぐらい経った。毎日学校へ行くのが楽しみで仕方なくなつた私は、傍から見ているもなんとなく楽しそうらしく、お母さんに、最近生き生きしてるけど何かあったの、なんて聞かれたりした。別に、と誤魔化しておいて今日も私は明日香と登校する。

「おはよう」

「おはよう。いい知らせがあるわよ」

と、明日香がニコニコしながら言う。もしや・・・と思ひ当たる節を考えていたら、そのまさかだった。

「再来週の日曜日にクラスの何人かでカラオケに行くことが決まつたよ。ほら、文化祭の打ち上げ代わりにってことで」

「本当に!？」

「でもね、大人数なんだけどね。殆ど全員来るんじゃないかな」

「あー、そうなんだ」

それじゃ普段のクラスと余り変わらないな、などと私は思った。

「ま、なるべく近くに座れるように工作してあげるからさ。歌う曲準備しておきなよ」

「うん、そうする。人数多いと一曲ぐらいしか歌えなさそうよね」
などと話しながら私たちは学校へ向かった。街路樹たちが木の葉を散らし始めている。電柱の上ですずめやハトたちが好きずきに声を鳴らしていた。

その週の土曜日の夜、私はまた録画を溜め込んである「三月の雪空」を観た。最終回が来てしまった事を私は新聞のテレビ欄で知った。一体二人の恋はどうなるんだろう、とまんじりもせずに見た。ユウジくんのお父さんは本当に転勤が決まってしまった。離れ離れ

になってしまふ二人。二人は、夜の神社の境内の階段に手をつないで座っている。

「ずっと、ちゃんと言おうと思ってたけど、言えなかったことがある」

「なにを？」

「俺は、アミのことが好きなんだ」

「私も、ユウジくんのが好き」

「富山県に行っても、ずっとだ」

「私も、ずっと好き。帰ってくるのを楽しみに待ってるよ、ずっと」
「ありがとう。さっきも言ったけど、一年とちよつとだけらしいから」

ここで画面が大写しになって、遠くから二人を眺める。二人の顔が近づいた。キスしてるんだな、と思って照れくさくなった。その時、夜空から、ちらほらと粉雪が舞ってきた。

「雪だよ」

アミちゃんがそつと手のひらでひとひらの雪を受け止めた。すぐに溶けてしまふ。

「すぐ、溶けちゃう」

「はかないね」

二人は、それぞれが何らかの想いを抱いたかもしれない。

「でも、降り積もった雪は溶けない。厚い塊になっていつまでも存在しつづけるよ」

「そうね、私の気持ちも・・・」

ここでこのドラマの主題歌が流れ始める。画面は夜空を降りてくる粉雪に切り替わった。これが、三月の雪空か。私は目が潤んだ。

たとえ神様が 辛い試練を与えたとしても

わたしは耐えられるよ キミへの想いがあるから

眠れない夜には キミの笑顔を思い出そう

誓ったあの約束 破られる事はないから

三月の雪が 私たちを祝福するように降り注いだよ
キミだけを いつまでもいつまでも愛し続けるよ

終わった。エンドロールが流れる。私はハンカチで涙を拭きつつ、もう一度最後の曲を聞いた。歌手の名前と、曲名を記憶した。今度のカラオケでは、この曲を歌う事にしよう。覚えるために、何度も聞いた。夜も遅くなってきたので、私はヘッドフォンをした。そしてつい口ずさんでしまい、またお母さんに怒られるのだった。

十一月になって最初の土曜日に、学校で文化祭が行われた。と言っても、特段たいしたイベントがあるわけでもない。中学校の文化祭なんて面白くもなんともない、と私は改めて思った。明日香らと適当に教室をうるつきながら、話は明日のカラオケに事になった。

「明日はお昼の一時に集合だよな」

「そうよ。お洒落してくるのよ？」

「うん、服はお母さんと買いに行ったピンクのセーターとデニムのスカートを着ていくよ」

「歌う歌は何にするの」

「内緒。もう決めてあるよ。明日のお楽しみ」

「ふふふ。真治君とかなに歌うんだらうね」

「さあ、想像もつかないね」

「演歌だったらどうする？」

「えー、そんなの絶対ありえないしー」

と、私たちはたわいもない話をして、文化祭の日を過ごした。家に帰り、明日の服のチェックなどしていると、緊張して胸が苦しくなる。ベッドにパタンと転がり込む。明日は、カラオケだけじゃないんだ……。これは私一人が独断で決意したことだ。明日香にも何も言っていない。人に頼ってばかりいちゃ駄目だ。自分も、動か

なきや。私は表紙に「秘密ノート」と書いたノートをめくる。何度も予習した。前に、進まなきや。ノートをしまい、カーテンを開けてネオンの輝く街並みを眺める。綺麗な景色だ。私の家は高台にあるので、街をちよつど見下ろす事が出来る。しばらくして、カーテンを閉じた。明かりを消して、布団に潜り込む。私は不思議な緊張と充実を味わいながら、長々と色んな想像をしていた。そうしているうちに、知らずと眠りについた。

第九章 空、晴れあがった

私は今、手元にある携帯をじつと見つめている。そこには、真治君のメールアドレスがある。本当に手に入ったんだ、と思つては、これは現実なのかな、とか、急に消えちゃうんじゃないかな、などと変な事を考えてしまう。ともかく、今日は私はがんばった。約束どおり、明日香らはカラオケに連れて行ってくれた。真治君もいた。他にも大勢いたけれど、殆ど誰が来てたか覚えていない。上手く誘導されて、私は真治君の横に座る事が出来た。それだけで心臓がバクンバクンいつて、歌うどころじゃなかったんだけど、真治君はあの夏のプールの約束を覚えていて、何歌うのとか聞いてきた。予定していた、「三月の雪空」の主題歌「キミと離れても」を蛮勇を奮つて歌った。みんな、さすが合唱部、と褒めてくれて嬉しかった。真治君も感心してくれた。頬がまた赤くなっているだろうけど、そのままその気持ちを感じ続けて、私は幸せだった。その後はみんなでファミレスに行った。そして、その帰りに、私は勇気を振り絞り、真治君にメールアドレスの交換を申し出た。今思うと一体どうやってそんな真似を実行できたのかわからない。私じゃない誰かがやったことみたい。ほうっ、とため息をついて一旦携帯を閉じる。今悩んでいるのは、さあ、何をメールしようか、と言つ事である。もちろん今日の事を打てばいいとはわかつている。でも、どんな風に？日曜の夜、街は落ち着いてとても静かだ。ひとり私の胸中だけが穏やかでない。今日はともかくたくさんがんばった、と、そこは自分を褒めてあげたい。秘密ノートの予定通りに行った。が、しかし、その後どんなメールを打つのかまでは考えていなかったのだった。結局、私はメールを打てずに眠ってしまった。

翌朝、明日香と登校する時に、その話をしたら、あー、まあ、聞

いといて打たなかったのはちょっとまずいかもね、でもどうせ今日も会うじゃん、言葉でちゃんと昨日は楽しかったとか言っておいたほうがいいんじゃない、などと言われた。だいぶ後悔した。気持ち沈みこみな顔を見せたらしい、明日香は何、これからよ、昨日はよくやりました、と肩を叩いてくれた。

教室で、私は無難に真治君に挨拶をし、昨日のお礼を言った。真治君は、ああ、うんうん、楽しかったな、と普通に笑顔を見せてくれた。そしてその後もいつもと変わらない。私にとっては途轍もないイベントだったけど、真治君の中では普通の休日の一日を遊んだだけ、なのだな、と思うとちょっと寂しくなった。私は、あなたの何なんだろう、ただのクラスメート？隣の席の女の子？ちょっとだけ歌の上手な合唱部の暗い子？私は、授業なんか全く耳に入らず、そんな事を考えていたのだった。

夜、部屋で宿題を適当に片付けていたら、メールが一通来た。見ると、なんと真治君からではないか。一気にテンションが上がり、例のごとく心臓が高鳴る。恋愛は心臓によくない、と言う事を私は知った。慌てて開封すると、昨日は楽しかった、これからも仲良くしてな、今度はみんなでボーリングに行こう、と言う内容だった。私は、喜びとときめきで椅子から落ちそうになった。十回ぐらい読んだ後、即明日香に電話した。

あくる朝になった。明日香が迎えに来る。満面の笑顔に釣られて私も笑顔になった。

「いい展開だねー。好意もたれてるんだろっね」

「そう思っているのかな・・・」

「あんだ碌ろくにメール打てなかったのに、向こうから打ってきたんでしょ？関心ない相手ならスルーよ、スルー。しかもまた遊ぼう、って言うてきたんだから」

「でも、みんなで、って言ってたよ」

「二人きりで、なんてさすがにいきなり誘えないっしょ」

「ああ、そうだね」

真治君と二人でデート？そんな事になったら私死んじゃうかもしれない、と勝手に妄想して思った。

「とにかくー！前途は洋々だね」

明日香が肩を組んでくる。私も釣られて肩を組んだ。見上げた朝の大空は雲ひとつなく真っ青に無限に広がっている。私は大きな声で言った。

「空、晴れあがった！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5839f/>

空、晴れあがった

2010年11月12日16時25分発行